

あの頃の村研

中 村 吉 治

あのころは、まだ村があった。私たちの村の研究は、最高潮だった。村落社会研究会の第一回大会が開かれるについて、誘われれば

勇躍これに応ずる下地があつた。村研の発生の事情も、いつからのことであるかも、まったく知らなかつたが、そのはじめての大会が仙台で開かれるというのであり、私の古くからの先輩である有賀喜左衛門名主から趣旨を聞いて、在仙の私たちのグループは、一も二もなく参加した。そして、新参のくせに、はじめから古參会員に迷惑もせず、しゃべりまくつたようである。時の勢とでもいふべきか。正面きいていえば、社会学者たちとの交流に魅力があつたということになる。諸科学の総合・共同研究ということが、そのころから、開かれるようになつて、いた。社会学会の中から村の研究者が分れて、専門的にその会をつくると同時に、広く経済学者や歴史学者と協力しようという意図があつたのであろうから、村研はこの新参ものたちを快く迎えてくれ、第一回大会にも並べてくれたわけであろう。バラ色の討論が期待された。

村研の集会は面白かった。学会風の報告と質疑・討論も面白かったが、そのあともよかつた。ひつくるめて集会がたのしかつた。仙

台の第一回大会では、酒が多くて、仙台発の終列車まで「討論」していった会員を送りだしたあと、在仙の会員がさらにがんばつたが平らげきれず、あと何日か会場に借りた農研のどこかに、いくつもヤカンの中で滞留して始末に困るという珍現象を呈した。それはいい先例になつたがどうかわからぬが、遠慮なく胸襟をひらいて談笑裡に諸学交流の風を起すには、多少はよき慣例となつたかも知れぬ。この風をもつと発展さすべく、会員の総意で合宿の機運をもりあげ、実現し、慣例化したことになる。

友人知人ができた。いろんなお人柄が、その人の学説とは別に知られたのも、多分有益だつたろう。しかし、社会学と歴史学と経済学などの諸学の総合や交流は、口でいうほど簡単ではないし、バラ色の夢は色あせがちだったようである。いつの大会のあとでも、どうも話がかみあわぬといふやかれた。しかし、あれこのあとで、毎年これでよろしいという満足感をもつよりは、何か不満でこんどはどうしようという反省と苦慮がくりかえされる方がよかつたという気がする。何かをぶつけあう中で、そうして夜の部の談論風発の中で、何となく互いに漫透しあう何かがあつたことは疑いがないからである。一列一体に結論は同じになる報告や決議が行われる風にならないところがよかつたのではないか。累積された年報の各自の研究論文は、一つの方向や色彩を帯びないで、各自の研究たるを失つていはない。その量も目をみはるほどになつた。これでいい。まだ二〇年だ。急ぐこともあるまい。

妙なことになつてきたのは、会の方ではなくて、村の方である。村が生きものであることを、これほど強烈に示すことが目前に展開されることは、あのころでは思いもよらなかつた。歴史の中だけに見えた村の変革のあらしが、現在のこととして吹きられるようになつた。いまやどうやら村がなくなつてゆきそうなんばかりである。都市化だの離農だのという言葉ばかりが聞かれるようである。機械化だの借金だの、村研も忙しいことになるようである。

ところで、このごろ安孫子麟に聞いたことだが、村の中には、今

と呼ぶことが依然としてあるという。東北のある村の話だが。その地方でも他と同じく、農外労働が多様化し、農外収入が多くなり、専業農家が減ってゆくのだが、そこで農外の仕事を主としてゆく人たちを「むだ人」というのだそうである。うまい言葉である。おもしろい言葉だ。中世では、農から離れた人、土地によらない生活者を、すべて職人と呼んだ。手工業者も絵師も学者も伎芸の徒もすべてである。職人という漢字でなく、民衆の言葉で何といつたか不明だが、通常村落共同体からはみ出た人、つまりは通常の働きでない者という意味である。やや貶視したり、聖視したりしている。そういうものとして「むだ人」と似かよったいいかたがあつたかも知れぬ。古代になると、農から離れ、土地から離れた生活者は、はつきり賤民か聖である。奴隸はその代表だろう。こんな伝統的な感覚が、村人の中にはまだあるのではないか。變つてはきたが、村はなかなかならない。村研は忙しくなりこそすれ、まだまだやることはなくなりそうもない。しかし、村研の会員のごときは、まっさきに「むだ人」とされるだろう。憂うことなけれ。いつの世でも、その当世の「むだ人」は、そのことの故に次の世の主導となつた。村研は大いに「むだ会」になるがよろしく、会員は大いに「むだ人」になるがよからう。当世に有用な会になるなけれ。